

アートと社会学の新たな接点
(テーマセッション 2)
「踊る身体」にみるビジュアル調査法の可能性

大阪市立大学 ケイン樹里安

1 目的

Arts Based Research (以下 ABR) とは、研究過程や成果物にアーティストックな表現を積極的に取り入れる探索的でオルタナティブな研究実践だとされる (Baron & Elliot 2012)。では、ポピュラー文化をめぐる人々の文化的営為を研究対象にする文化社会学において、アートを軸とする社会的な調査 (Arts Based Sociological Research?) とはどのようなものでありうるだろうか。社会学者はアートという言葉が作品 (The Work of Art) という意味だけでなく、技術や技芸といった意味合いでも用いてきた。たとえば、写真を用いたビジュアル調査法を沈黙させられた人々の声に「耳を傾ける技術 (Art of Listening)」として位置づけたレス・バックにとって、アートとは「洗練されるべき社会調査における技術」という意味合いをもつ (Back 2007=2014)。一方、自らボクサーとなることでエスノグラフィックにボクシング文化を描きだしたロイック・ヴァカンにとって、アートは「身体文化における技芸 (Art)」にほかならない (Wacquant 2004=2013)。実験的な調査手法によって社会学の意義と倫理を問い返すバックと、自らの身体を「問いのツール」として駆使しながら写真撮影を行い、研究成果の一部を「社会学的小説」として提出したヴァカンのパフォーマンス的な研究実践は、厳密な意味では ABR からやや外れるのかもしれないが、アートを軸とする社会的な調査として示唆的である。そこで本報告では、①ポピュラー文化における作品、②社会調査における技術、③身体文化における技芸、という 3 つの視角からアートを捉え、具体的な調査事例を検討することで、文化社会学においてアートを軸とした社会調査をめぐる可能性と課題を抽出したい。

2 方法

本報告では、関西を中心に活動し今年で 13 年目を迎えた、ある「よさこい踊り」のチームにおける身体実践を調査対象としたビジュアル調査法を活用した参与観察のプロセスおよび成果を考察の対象とする。本事例におけるアートとは、作品としての演舞、技術としてのビジュアル調査法、技芸としての踊りという身体実践が該当する。なお、調査対象者による写真・映像資料も積極的に分析の対象に加える。

3 結果・考察

人々の文化的営為と日常生活との連関、個々の／集团的な身体的実践のプロセスや差異、文字表現や口頭報告では取りこぼしかねない社会風景の豊穡さ、文化の担い手の移動性や空間との関わり、断続的な文化実践に用いられる多様なリソース、集団内部のミクロな力学、調査対象者やフィールドとの関係性や調査者自身の時間的な変化などを、具体性 (Concreteness) をもって視覚化 (Visualize) しようすることに、自らの身体を伴ったビジュアル調査法の利点はあると思われる。重層化したメディア環境における研究成果物の公開は、誰をオーディエンスとして想定し、何のために実施されるのか。質的調査法の 1 つとしてのビジュアル調査法の妥当性や倫理の問題をいかに考え、どのように実践していくのか。具体的な写真や映像を示しつつ「踊る身体」をめぐる研究実践を検討することで、文化社会学におけるアートを軸とした社会調査をめぐる議論を深める端緒としたい。

【参考文献】

Barone, Tom & Eisner, Elliot, W, 2012, *Arts Based Research*, LA: SAGE Publication Inc.

Back, Les, 2007, *The Art of Listening*, Oxford: Berg. (=2014, 有元健訳『耳を傾ける技術』.)

Wacquant, Loic, 2004, *Body and Soul: Notebook of an Apprentice Boxer*, Oxford University Press. (=2013, 田中研之輔・倉島哲・石岡丈昇訳『ボディ&ソウル——ある社会学者のボクシング・エスノグラフィー』新曜社.)